

NIPPON

かわら版

53号

日本製紙

発行所 東京都千代田区一ツ橋一丁目2番2号 〒100-0003 日本製紙株式会社新聞営業本部 電話 03-6665-1030 FAX 03-3217-3161 www.np-g.com/ newsprint@np-g.com ©日本製紙株式会社2013

引込線復旧で 全国へつながる石巻工場

常務取締役 石巻兼岩沼工場長 藤崎 夏夫



写真は岩沼工場にて撮影

今年の3月で東日本大震災の発生から早くも2年が経ちます。津波により甚大な被害を受けた石巻工場は、完全復興に向けて歩み続け2012年8月にN2マシン・2号コーターが再稼働を果たしました。これで予定されていたすべての抄紙・塗工機が立ち上がりました。しかし製品の鉄道輸送に不可欠な工場製品倉庫への引込線はまだ復旧していません。その引込線がついに今年の2月に復旧する予定です。かわら版でも復興の経過をお伝えしてきましたが、復興の終着点とも言える鉄道輸送再開について藤崎工場長に語って頂きました。



(左) 製品倉庫内を通る引込線(岩沼工場)
(下) 石巻港駅の鉄道輸送再開式で祝辞を述べる藤崎工場長



復旧までの道のりを振り返って。

石巻工場は津波による甚大な被害を受けましたが、一昨年8月に6号重油ボイラーに火が入り、震災から約半年後の9月に8号マシンの操業を再開することが出来ました。それを皮切りに、11月にN4マシン・4号コーター、昨年2月にN5マシンが、震災から1年後の3月にN6マシン、4月に7マシンそして8月末に最後のN2マシン・2号コーターが再開し、各設備が復旧を果たしました。あとは鉄道輸送の要である引込線の復旧を残すのみとなりました。

引込線の強みと震災の影響について教えてください。

震災前、トラック輸送、海上輸送、そして鉄道輸送の3つの輸送手段を利用していました。特にここ石巻工場は構内へ側線(レール)を引き込んでいたという強みから、国内出荷量の約5割をこの鉄道輸送が担っていました。鉄道輸送は輸送単位当たりのCO₂排出量がトラックの約7分の1と、様々な輸送手段の中

で環境負荷が少ないというメリットもあり、環境へ配慮しつつ効率良い輸送が出来ることから必要不可欠でした。

しかし震災により機関車や台車、コンテナが被害を受け、全国につながっていたレールも寸断されてしまいました。マシン操業再開後は、工場からコンテナ専用トラック(緊縮車)で仙台貨物ターミナル駅まで配送し、そこから全国へコンテナ出荷していました。しかしこの緊縮車は、1車につき3コンテナ(約13.5トン)の積載で、約25台程度しか利用出来なかったため、石巻⇄仙台(約50km)を数回往復しなくてはならず決して効率的な輸送とは言えませんでした。この問題を解消するためにも引込線の復旧は非常に重要です。

引込線に重要な石巻港駅が10月に復旧致しました。

工場から出荷されるコンテナの経由地であった石巻港駅も震災で甚大な被害を受けました。コンテナが津波によって散乱した様子をテレビなどで見た方も多いと思います。壊滅的な状態

となった石巻港駅ではありませんが、2012年10月9日に鉄道輸送再開式が催され、石巻の貨物の出発地点として鉄道輸送を再開しました。現在はこの石巻港駅と仙台貨物ターミナル駅間の往復運行を4本行っています。そして3月のダイヤ改正により震災前と同じ7往復になる予定です。製品出荷に欠かせない鉄道輸送が再開することは大変心強く、環境に優しく効率的な鉄道輸送を積極的に活用していきたいと思っています。

残るは石巻港駅から工場への引込線となりますが、現在開通に向けレールの敷設や機関車の修理など準備を進めており、2月に開通の予定です。製品倉庫をスタート地点としたレールがついに敷かれ、震災前の本来の姿に戻ろうとしています。これでようやく全国へ道が通じ、思いがつながります。

今後についてお聞かせください。

震災前に戻るだけでなく新たな取り組みも行っています。JR貨物では震災後、災害廃棄物専用列車の運

を実施しており、この石巻港駅からも東京向けに石巻周辺の災害廃棄物を積載した運行を開始しました。震災がれきを積載出来る新しい形のコンテナとなっておりますが、帰り荷が無いためこれを活用出来ればと思っています。

また我々も復興に満足することなく、独自の津波対策を検討中です。国が造る防潮堤は100年に1度の7.2mの津波を想定していますが、その防潮堤を越える可能性も想定して越流分を食い止める1~2mの防潮堤の建設を工場独自に検討しております。現在のクラリファイヤー設備やチ

ブの山なども防潮堤の役割としてカバー出来ると考えており、それもうまく活用して津波に強い工場にしていける予定です。それに伴い搬入路もトラックなどが防潮堤を越えて進入出来るようスロープにする工夫が必要で。事務所から高台へすぐに避難出来るルートを確認するようにしたいと考えています。

これまで復興してきた苦労・努力と、これからの未来への期待を込めて全国のユーザーの皆様へ優れた製品をお届け出来るよう努めてまいります。今後ともご支援の程よろしくお願い致します。



製品倉庫のプラットフォーム(岩沼工場)

この3月、本社を竹橋から御茶ノ水へ!

当社グループは、今年3月に本社を移転します。新社屋となる「御茶ノ水ソラシティ」は、地下2階・地上23階の建物で、当社は6階から12階部分を使用します。免震構造や、非常用発電設備など、災害対策が十分に取られており、企業のBCPを考慮した構造になっています。3月中旬から引越しを始め、3月25日(月)より新本社で営業を開始する予定です。グループ内の連携を充実・強化し、グループ経営効率の更なる向上を実現して参ります。



第5回 東北・新潟新聞用紙品質会議

開催日／2012年9月7日(金)

参加社／東奥日報社、デーリー東北新聞社、秋田魁新報社、岩手日報社、河北新報社、山形新聞社、福島民友新聞社、ミノリ郡山工場、新潟日報社(新聞社23名、当社24名)

「第5回東北・新潟新聞用紙品質会議」が昨年9月7日に東奥日報社様に幹事会社をお引き受け頂き、青森県で開催されました。一昨年の東日本大震災により延期を余儀なくされ、2年振りの開催です。今回の品質会議は出席者にとって大変、感慨深い会となったものと思います。

会議は石巻兼岩沼工場長／藤崎の挨拶で開会、石巻・岩沼の復興と品質会議再開に多くの支援を頂いたことに対しお礼と感謝の意を伝えました。続いて、新聞社様を代表し東奥日報社常務取締役／洞内様より石巻工場が完全復興を果たしたことに対してお祝いの言葉、東日本大震災を経て新聞の存在感が高まったこと、震災の反省と教訓を今後を生かしていくことの重要性についてのお話を頂きました。

続いて、当社からのテーマ発表に移り研究所及び工場からの発表やエネルギー事業部長／野

村による「当社エネルギー事業」、「石巻・岩沼工場の被災及び復興状況」のDVD上映。岩沼工場製造部長／渡邊から「震災後の岩沼工場の復興状況(傷跡から再生へ)」の報告と盛りだくさんの内容となりました。国内において紙の需要が減少傾向の中、余剰となった自家発電能力を有効活用し、事業の構造転換を図っている当社の状況を報告。また、参加された皆様には当社の新聞用紙主力工場である岩沼工場の復興を遂げた状況をご理解頂けたと思います。

続いて行われた当社製品使用状況の報告及びディスカッションでは、ペスター前後のシワ入りや見当ズレなどの課題に対して、新聞社様同士で活発な情報交換を行う場面が見られ、例年に比べ熱のこもった会議となりました。この会議も5回目を迎え、「お互いの技術課題や問題点を共有化し、より一層の絆を深める」という



東奥日報社(幹事会社) 洞内常務取締役ご挨拶

第54回 九州新聞用紙品質会議

開催日／2012年10月16日(火)

参加社／大分合同新聞社、南日本新聞社、熊本日日新聞社、長崎新聞社、佐賀新聞社、沖縄タイムス社(新聞社20名、当社17名)



◆大分県にて開催

10月16日大分合同新聞社様を会場に、総勢37名にて「第54回九州新聞用紙品質会議」を開催。会議は主催者を代表して当社八代工場長／原田からの挨拶、幹事会社様を代表して大分合同新聞社／利満専務取締役より「昨今の電力不足に伴う計画停電・節電対策、数年後に控える消費税増税など様々な問題・課題を抱え、大変厳しい状況が続いています。本品質会議が皆様にとって実りあるものとなるよう期待しています。」との挨拶を頂き開幕しました。

◆熱のこもった議論交わす

各新聞社様からの事前アンケートに基づき、①節電の取組み②新規顧客開拓を目的とした用紙提案③当社品使用状況についての議論を行いました。新規顧客開拓の議題では、各新聞社様とも差別化を図る目的で「白色度の高い用紙」に興味を示されたものの、不透明度低下による印面への影響やコストアップが懸念材料との声。当社からは、白色度の高い中質紙やセミ上質紙を参考資料として紹介しました。

使用状況の議題では「見当ズレ」の問題がクローズアップ。大きく改善された新聞社様もありましたが、一部では「冬季の印刷時、見当ズレが顕著に現れる」とのご指摘。当社から季節に関係なく、安定した製品の供給に努力する旨を伝えました。この他にも当社に対する率直なご意見を頂き、更なる品質の安定・向上を目指す上で大変有意義な意見交換を行うことが出来たと思います。

◆当社からの発表

エネルギー事業部長／野村より「日本製紙グループのエネルギー事業」について説明。東日本大震災後に日本製紙グループが自家発電設備の



本会議の目的が参加者の皆様に浸透しつつあると感じています。

また、今回より新たな取り組みとして会議終了後にアンケートを実施。参加された方々からは数多くの貴重な意見を頂くことが出来ました。「内容が分かりやすく有意義だった」「今後も継続して欲しい」など数多くのありがたい回答を頂いた一方、「使用状況報告の時間を増やしてもらいたい」といった改善要望も…。頂いた意見は真摯に受け止め来年度以降の運営に生かしていきたいと思っています。

新聞社様の多大なるご支援のおかげで、東北・新潟新聞用紙品質会議を再開することが出来ました。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。今後も当会議を意見交換の貴重な場として末永く継続していきたいと考えておりますのでご協力の程よろしくお願い致します。



大分合同新聞社(幹事会社) 利満専務取締役ご挨拶



大分合同新聞社(幹事会社) 在取締役制作本部長

フル活用により各電力会社へ135,000kWの供給を行った実績を紹介。関西・中部電力での節電分に対する、八代工場の自家発電余剰電力を活用した「みなし節電」実施を報告。今後は国家のエネルギー政策の動向を注視しながら、エネルギー事業を当社の中核事業として育てて行く考えをお伝えしました。

最後になりましたが参加された新聞社の皆様の多大なるご協力、ご支援に感謝すると共に、この度幹事会社としてご尽力頂きました大分合同新聞社様に厚くお礼申し上げます。来年度は鹿児島県(幹事会社:南日本新聞社様)にて開催を予定しています。

かわら版 NIPPON 2012年を振り返る

1月

「復興へのキセキ。」展を開催

当社は、本社ビル9階で「復興へのキセキ。」展を開催。震災後に頂いたご支援やご協力に対する感謝の意と、現時点での復旧・復興の状況伝えることを目的としました。4日間で1,600人以上の方が来場、新聞社の方にも多くお越し頂き、その後各営業支社でも同様に開催しました。



2月

クレインズ全日本選手権3連覇達成

7日～12日までの6日間、青森県八戸市で行われた第79回全日本アイスホッケー選手権大会の決勝で王子イーグルスを3対1で破り、3年連続5度目の優勝を飾りました。



2月/3月

石巻工場N5・N6マシン操業再開

東日本大震災により甚大な被害を受けた石巻工場にて、22日にN5マシン、3月9日にN6マシンが操業を再開しました。主力設備の復旧により石巻工場の生産能力の約8割が回復しました。

3月

「洋紙事業復興計画」抄紙機5台 塗工機3台を停機

一昨年8月に発表した復興計画に基づき、石巻・岩沼・富士と日本大昭和板紙吉永4工場抄紙機5台、塗工機3台を停機しました。停機に伴う銘柄の移抄、統廃合に際し、顧客の皆様を始め、関係各位のご協力にお礼申し上げます。



富士工場のSL紙・高白紙生産終了

洋紙事業復興計画に伴う一環として、富士工場が生産していたSL紙・高白紙を岩沼に集約し、富士での新聞用紙生産が終了となりました。長年にわたり富士工場の新聞用紙をご愛顧頂いた新聞社の皆様に改めて心よりお礼申し上げます。

4月

石巻7号マシン操業再開

石巻工場では19日に7号マシンの操業を再開しました。また5月9日に立ち上げた仕上げ設備により、新たにPPC(コピー用紙)の生産を開始しました。

日本製紙グループ組織再編を発表

日本製紙、日本大昭和板紙、日本紙バック、日本製紙ケミカルの4社は10月1日に合併することを決定しました。また、来年4月1日には日本製紙グループ本社と日本製紙が合併し、日本製紙が存続会社となります。

5月

本社ビルでサマータイムを実施

昨年に引き続き、今年も本社ビルでサマータイムを実施しました。東日本大震災に伴う節電対策の一環とし、また労働福祉の向上を目的として9月末までの5カ月間取り組みました。

6月

日本製紙石巻野球部 都市対抗本選出場ならず

第83回都市対抗野球大会第2次予選東北大会に当社石巻野球部が出場しました。あと1勝で都市対抗本選に出場でしたが、惜しくも敗れ2年振りの本選出場は果たせませんでした。皆様の熱いご声援ありがとうございました。



8月

石巻工場、完全復興! N2マシン、2号コーター操業再開

石巻工場では、30日にN2マシンと2号コーターが操業再開しました。「洋紙事業の復興計画」に基づき作業を進めて来た抄紙機6台、塗工機2台がすべて操業を再開し、完全復興を果たしました。



釧路工場でクラフト紙の生産体制確立

釧路工場にて富士工場から移抄することになったクラフト紙を、新聞用紙専抄6号マシンで生産するための品質・操業対策工事が完了し、22日に竣工式を執り行いました。1台の抄紙機で新聞用紙とクラフト紙の両方を生産出来る設備は世界でも前例がなく、当工場が初めてのケースとなります。

品質保証部登山チーム 今年も富士山を登頂!

一昨年雨の中、登頂を果たしたメンバー(安永、植田、八島、廣本、田中、長妻、杉山)が「今年こそはご来光を!」とリベンジに挑戦!更に谷口、櫻井の営業メンバーも加わり見事登頂に成功しましたが今年もご来光は拝めず意気消沈…。来年もリベンジか!?



9月

富士工場(鈴川)の全製造設備を停止

10月

4社合併式を挙行

第21回新緑会 櫻井主任初優勝!

新聞営業部ゴルフコンペ「新緑会」において櫻井主任が初優勝を成しとげました。グロス92、ネット64のスコアで参加者中で断トツの1位となりました。



12月

衆議院選挙により休刊日発行相次ぐ

野田首相の突然の解散宣言で年内に行われることになった衆議院選挙。16日に投票票が行われ、前週の10日はもともと新聞休刊日でしたが、東北地区を中心に休刊日発行を行う新聞社様が見受けられました。

沿道の声援に励まされ 逆風に耐え激走!



第31回 八戸うみねこマラソン 2012.5.13

主催：デーリー東北新聞社

『走るあなたが主役です!』をテーマに、第31回八戸うみねこマラソン全国大会(デーリー東北新聞社主催)が昨年5月13日(日)に開催されました。

一昨年の第30回記念大会は、東日本大震災の影響で初の中止となり、今回は2年振りの開催です。全国各地から市民ランナー5,591名(過去2番目に多い出走人数)が八戸市に集結し八戸港の周辺を走る、ハーフ、10km、5km、3kmの4種目、18部門に分かれ行われました。

まだまだ肌寒さの残る5月の青森県。ス

タート前は防寒着が必要な気温と曇に覆われた空模様。しかし、ランナーのこの大会にかける情熱や熱気により上空の雲を追い払い晴天へ…。絶好のコンディションの中、海沿いのコースをゴール目指して健脚を競いました。

日本製紙グループとして平成18年より参加を始め、今回で6回目です。選手団は齋藤支社長を団長に過去2番目に多い14名が各種目にエントリー。

スタート直後は追い風に背中を押され、軽快なペースで走ることが出来ましたが、

折り返すと状況が一変、今まで味方だった風が敵となり、逆風となって襲い掛かってきました。疲れが見え始めた後半、前傾姿勢を保ちつつ、いままでに経験したことのない風と戦い、苦しみながらのレース。沿道からの温かい声援に後押しされ、強い向かい風に立ち向かい、全員が無事完走出来ました。

走り終えた選手からは、来年はもう少し長い距離を走りたい!来年はハーフに出場!など、次回に向けた目標コメントも飛び出すなど、全員が達成感を味わうことの出来た良い大会であったと思います。



太陽と海とジョガーの祭典

第28回 NAHAマラソン 2012.12.2

主催：沖縄タイムス社

はじめに

毎年冬の恒例行事になった第28回NAHAマラソンに今年も参加しました。九州営業支社から3名、八代工場から3名、関連会社から4名の計10名で那覇の街を疾走しました。

NAHAマラソンとは

NAHAマラソンを少し紹介したいと思います。NAHAマラソンは約25,000人が出場する大型市民マラソンです。特徴として、制限時間が6時間15分と初心者には少し厳しい、坂道が多くかなりのスタミナが求められる、25度を超すこともある12月とは思えない暑さ、そして地元の方からの暖かい声援が挙げられます(黒糖・おにぎりなど差し入れも多く栄養補給に困りません。私は走った後の方が体重が増えました)。特に応援は本当に素晴らしくまるでお祭りです。それに魅了されリピーターになる人も少なくありません。

レース当日

当日は15年振りの雨天でのレースとなり、時折スコールのような激しい雨が降り付けました。足元は相当に悪かったのですが、幸い体力を奪う太陽は照りつけず、ランナーにとっては比較的走りやすい環境でした。その影響か当グループメンバー10名の内9名が時間内に完走という結果を残すことが出来、またレース終了後には沖縄タイムス社様に慰労会を催して頂き、おいしい沖縄料理に舌鼓を打ちました。

最後に

終了後、脚はズタボロになり階段も満足に上がれない状態になりましたが、心が満足感であふれているのは、自己記録を更新して完走出来た達成感と多くの声援をくれた沖縄の人への感謝の気持ちに他なりません。最後になりますが、主催者の沖縄タイムス社様を始め、ボランティア、多くの関係者の方に本当にお世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました!また、来年も参加します!!

